

説教 『この胸に授けられた律法』 山本護 牧師
聖書 エレミヤ書 31:33/マルコによる福音書 1:9~11

イエスが洗礼を受けると「天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた(マルコ 1:10~11)。

鳩のような“霊”を見、父なる神の声を聞いたのはイエス御自身。クリスマス、イエスは神の子として生まれたが、ここで初めて己が使命を受け取り、自覚的に洗礼者ヨハネの衣鉢を継いだ(1:14)。形としてはヨハネの継承だが、内実は随分違う。ヨハネがエルサレムの荒野で「悔い改め」を強く求めたのに対して(1:4)、イエスは草木が茂るガリラヤで「福音=良きおとずれ」の到来を告げた(1:14~15)。

ヨハネは「わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる(1:8)」と言った。今日の洗礼では見える水が用いられるが、本質は見えない聖霊。その聖霊は、天が裂けてイエスに降った「鳩のような“霊”(1:10)」のこと。私たちはこの“霊”を受け、霊によって「呼吸(霊)し」、霊で祈り、従い、泣き笑いし、行動している。私たちの命は常にこの“霊”と共にある。

「わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる(エレミヤ 31:33)」。「わたし(神)の律法」というと、何か厳しい倫理のように思うかもしれないが、まったくそうではない。律法の根っこである神の霊が、この胸に、この心に授けられた。律法の根っこにあるものは、私たちが「呼吸(pneuma)」させて生かす「霊(pneuma)」である。

世の低みに降り、悔い改めの洗礼まで受けるほどに(マルコ 1:9)、人間を引き受け給うキリストの霊。洗礼はただの入会儀礼ではない。「わたしの愛する子、わたしの心に適う者(1:11)」であるイエスに、「天が裂けて“霊”が鳩のように降って来た(1:10)」その“霊”が、私たちに分かち与えられている徴なのだ(1:8)。だから私たちが「呼吸(霊)」して生きる所には、キリストの姿が否応なく響いている。

聖霊がこの胸に授けられていることは分かった。それで私たちは何をすればいいのか。「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる(エレミヤ 31:33)」。こうして相互に結びついているのだから「何をしてもいい」。私たちにはすべてが許されている。己が偏りを脚色せずに行うすれば、それが聖霊の現実となろう。無償の恵みを、ただ感謝して戴いていけばいい。聖霊(風)に吹かれるまま、愛されるままでいけば「何をしたいか」が自ずと決まるだろう。だが「何をしてもいい」のに、世の常識や規範に囚われてそれを抑え込むなら、この胸と心に授けられた律法(31:33)が二の次になってしまう。

キリストの名による洗礼で聖霊を授けられた者は(マルコ 1:8)、イエスが聞いた神の言葉を、身をもって世に現わしていく。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者(1:11)」。神の、イエスへの言葉が私たちへの言葉となる。聖霊を受けた私たちが「したいこと」を真っ直ぐに行くと、自ずと「わたし(神)の心に適う」こととなろう。しかしそれは、世の枠組みとぶつかりやすいし、世に建てられた教会の世間と摩擦を起こすかもしれない。聖霊を授けられているキリスト者同士は、教会での摩擦を相互に受け止め合い、この胸と心に納め、授けられている律法(エレミヤ 31:33)と共に現していきたい。



【おまけのひとこと】

自然な姿と言っても 大抵偽りの自尊心を幾重にも纏っている だが聖霊の御力はありがたきかな 痛みを伴って偽りから解き放たれる 傷があまり深くならないのは 偽りがほどほどのものだから